

BOOK Review

医療者のための 成功するメンタリングガイド



評者 青島 周一 医療法人社団徳仁会中野病院薬局

僕は書店が好きだ。書棚にずらりと並ぶ本の背表紙を眺めているだけで、新しい世界との出会いの予感に胸が躍る。装丁に惹かれた書籍を実際に手に取って、ゆっくりとページをめくってみると、紙面に並ぶ言葉たちを通じて自分の知らない景色を垣間見ることができる。手に伝わってくる本の重量は、それが大きなものであれ、小さなものであれ、重さを超えた概念の質量を宿している。

一冊の本との出会いは、物の見方や考え方を大きく変えることがある。その変化の過程に能動性、あるいは主体性というような意識や感覚はなく、ただ自分と本との関係性だけが世界を編み変えていく。このような経験こそが質の高い学びを駆動する一つのきっかけなのかもしれない。

誰かから「勉強しなさい」と言われても、必ずしも主体的に勉強をするようになるわけではない。もちろん、それがきっかけで継続的な学びにつながることもある。しかし他方で、誰に言われるでもなく無我夢中で勉強してしまうこともあるだろう。能動的あるいは主体的な学びと言ったとき、それは学習者の意志の強さというよりはむしろ、学びを欲することに対する自身の応答なのかもしれない。少なくとも、主体的な学びは指導者の一方的な教えの中にあるのではなく、指導者と学習者の関係性

の内にいるように思える。

本書は人材育成指導法の一つであるメンタリングについて、医療者に向けて書かれた実践書である。メンターは指導する（能動的な）立場、メンティーは指導される（受動的な）立場というイメージが一般的かもしれない。しかし、メンタリングの具体的な方法論についてあらためて考えたとき、その行為が能動/受動という概念では収まりきらないことに気付く。学びは指導者と学習者の関係性なしでは成り立ちようがないからだ。だからこそ、メンタリングの大切さを理解していたとしても、自分がどうあるべきなのか、あるいは具体的にどのような仕方でもメンタリングを行えばよいのか、当惑してしまうことも少なくない。

メンターとして、そしてメンティーとして、双方がどのような仕方でも関係性を構築し、またその関係性の中で何を学び、成長の糧としていけば良いのか、本書はメンタリングの具体的なフレームワークを論じている。数々の実践可能なアドバイスは、メンタリングを円滑に進める上で有益な指針となってくれるだろう。さらに、巻末には豊富な参考文献や図書の紹介が収載されており、メンタリングのアウトカムが実り豊かになることを必ずや助けてくれるはずだ。

徳田 安春 監訳

A5判/168頁/2020年/定価2,750円(本体2,500円+税10%) / ISBN978-4-260-04311-3 / 医学書院刊